



一年目の「つくばサイエンス・アカデミー」

つくばサイエンス・アカデミー 理事・事務局長 岡田 雅年

昨年（平成13年）3月文部科学省金属材料技術研究所を退官したが、アカデミー事務局の人手不足を見かねて、つい「義を見てせざるは勇無きなり」などと持ち前のそっかしさを発揮し助力を申し出た結果、事務局長などを仰せ付かることになった。固よりその能力に欠けることは本人が十分承知である。が、もう引っ込みがつかない。などと顔に皺を寄せていたところに会員である旧友KZ兄が訪ねてきた。以下その会話から。

KZ: 一年目のアカデミーはどう。頑張っている様だけでも会員の期待に応えられるのか。

OM（私）: 厳しいね。アカデミー事業は、異分野交流の推進、技術移転の推進など5項目を掲げているのだけれど、推進委員会で検討の結果初年度は先ず存在感を顕わにするために事業中心で行くことにした。（本号4頁13年度事業計画）。準備不足でスタートしたため事務局が表に出ている感じを受けるかもしれないが、実体は研究者主導で進めている。一年目は来年度のための試行錯誤も容赦して頂きたいと思っているが、あくまで会員にアピールする事を第一にしている。

KZ: 活動の5項目を見ると、つくばには同様の組織、団体があるように思えるがアカデミーの特徴は何。

OM: 一口で言うと、組織を横断する研究者・技術者の個人的な出会いの場、さらに科学技術の最新の情報・知識の受発信の場で、その場作りに会員の独創性が発揮できること。抽象的な表現なので類似の所もあるかも知れないが具体的な活動で見て頂きたい。

KZ: 半年研究所めぐり等をやって来て感じたことは。

OM: 大学はさておき、改めてつくばには2種類の性格の研究所があると感じた。端的に言えば、先端技術を追うものと安全・安心を追う研究所がある。隣接していて

も両者の出会いや会話は非常に少ないとの印象を受けた。会議場に新設した「Salon Leo」（本号21頁）をイブニング・サイエンスの交流の場として是非活用してください。

もう一つは、各県に共通なのかもしれないが茨城県が産官学の連携、技術移転に力を入れてきている。アカデミーもその特徴を生かして協力していきたい。

KZ: 素人が任意の団体の運営に関与してみても難しいと頭を痛めていることは。

OM: 問題発言といわれるのを覚悟でいうと、会員に会員である具体的なメリットを提示することが難しい。特に所属学会と違って自分の業績に直接結びつかないものには積極的でない若手研究者にメリットを説明すること。若手を対象にするのは不相当であるという説もあるが、つくばテクノロジー・ショーケースなどにはぜひ参加して欲しい。しかし結局はアカデミーが実績を積んで行く他には無いだろう。長期的な課題だと思う。このような観点から、一年を経験した来年度には足腰の強い運営体制を組む必要があると感じている。会員のご意見を是非寄せて頂きたい。

KZ: そう、出来るだけ協力しよう。最初が大事、時には苦言、批判という形でね。

●おかだ・まさとし●

東京大学大学院冶金学博士課程を1964年に修了。ちょうど東京オリンピックの最中に米国アイオワ州の Ames Laboratory（当時USAECの機関）にポスドク研究院で2年滞在。その後、金属材料技術研究所（当研におけるポスドク経験者採用の第一号？）で原子力材料関係の研究を主に行ってきた。2000年3月まで金属材料技術研究所長。現在、日本原子力研究所特別研究員。つくばサイエンス・アカデミー（SAT）理事。2001年7月のSAT総会で理事兼事務局長に就任。

自己紹介は、「余裕ができれば絵画鑑賞など人並みにしたい。学生時代の趣味は寺と映画。現在のところは酒を酌み交わし誰とでも歓談すること。1人で味わうのも佳し」